OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「高台寺蒔絵」成立に関する一試論
Author(s)	並木, 誠士
Citation	デザイン理論. 1997, 36, p. 62-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52938
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「高台寺蒔絵」成立に関する一試論

並木誠士／京都工芸繊維大学

桃山時代の美術を語る際にかならず登場する「高台寺蒔絵」という語について，筆者はとりあえず「カッコ」付きで語っておくべきであると考えている。「高台寺蒔絵」という語が，高台寺にある蒔絵という以上の意味，つまり，一種の様式概念として用いられているということは周知の事実である。しかし，その様式概念が，はたして一貫性のあるものとして理解されうるかどうかという点については疑問の余地がある。

今回の発表では，「高台寺蒔絵」理解のために，その原点ともいえる高台寺霊屋の秀吉厨子扉にほどこされた蒔絵をとりあげた。そして，秀吉厨子扉の表裏の蒔絵意匠の様式的相違を指摘し，それを制作年代とのかかわりで考え，「高台寺蒔絵」の多様さに対するひとつの解釈の可能性を提示した。

秀吉厨子扉の蒔絵に関する漆工史の側のもっとも新しい見解である『國華』1192号所載の日高薫氏の論文によると，秀吉厨子扉は，併置されている北政所厨子扉とは制作時期がことなり，それは，伏見城から移築された可能性が大きく，高台寺に移築された折に表裏が逆にされたと記されている。

筆者も，この秀吉厨子扉が，北政所厨子扉とは別の経緯で制作されたこと，現在の裏面が本来おもに目にされていた面であること（表裏の問題ではない），それが，伏見城の遺構である可能性が高いこと，については日高氏の見解と共通する認識をもっている。

疑問点は，秀吉厨子扉の表裏の蒔絵が同一時期の制作でよいかどうかという点である。この点について，従来，表裏の蒔絵の制作時期がことなるという説は提出されていない。

詳細に検討すれば，表裏は，たんにモティーフが相違するという以上の相違，つまり，意匠構成に対する感覚の相違があると考えてよいだろう。筆者の疑問は，表裏の図柄について，絵画史の観点からみると，桃山時代的なものと江戸時代初期的なものとを感じるところから出発している。この点について，表裏の様式の相違を制作時期の相違として考え，菊楓蒔絵の扉を秀吉厨子に利用する際，扉の表面にふさわしい図柄を裏面（現在の表面）にほどこして活用したという推論をたてた。そして，この推論にもとづいて，つぎのふたつの方向で考えを進めた。

①菊楓蒔絵のほどこされた扉は，秀吉厨子に転用される必然性があった

②霊屋の厨子建立の年代と現表面の薄蒔絵の年代とのかかわりを考える必要がある

この扉が，建築的にみて移築されたことが明らかであり，しかも秀吉厨子の扉に転用される必然性があったとすれば，それは，この扉が伏見城の遺構であったためであると考えるべきであろう。秀吉厨子扉の表裏の制作時期がことなるという仮説を前提に論を進めると以下のようになる。

文禄元年（1591）に着工された秀吉の伏見屋敷は，文禄３年に拡張されて伏見城となる。この第Ⅰ期伏見城は，文禄５年閏７月13日の大地震で打撃を受けたが，その数日後には秀吉は再建を命じている。第Ⅱ期の伏見城である。第Ⅰ期伏見城については，倒壊後にその建築の一部が各所に移築されたという伝承があるが，この時点では秀吉は健在であり，北

政所が城の遺材をひきとる必然性はない。しかし，第Ⅱ期の伏見城に関しては，慶長３年（1598）８月18日の秀吉没後に，徳川家康が秀吉の後継者としての立場を明確にするために伏見城へ入っており，そのために慶長５年９月15日の関ケ原の合戦のおりには西軍の攻撃を受けて落城している。このときには，家康によって，翌慶長６年には再建工事がはじめられた。落城前の第Ⅱ期伏見城が全面的に取り壊されなかったことは，高台寺をはじめ豊国神社，都久夫須麻神社など，伏見城の遺材を用いたと伝えられる建物が現存していることにより，明らかである。そして，おそらくこのときに，この菊楓蒔絵扉も伏見城の遺構として，北政所のもとにひきとられたのではないだろうか。この時点ではすでに秀吉が没しており，家康と北政所との友好的な関係を考えれば，文禄５年再建の伏見城の遺構を北政所が譲り受けた可能性は高い。

慶長４年には，北政所は，秀吉没後に伏見城から移っていた大坂城をも引き払い京都三本木に居を構えている。慶長５年９月15日の関ケ原の合戦の時には三本木にいたが，９月18日には，愛用品や秀吉の遺品を豊国神社に避難している。家康は，慶長６年には小堀遠州を作事奉行として伏見城の再建に着手しているため，北政所が実際に遺構を譲り受けたのはこの再建時のことであろう。そして，この時点ではいまだ高台寺は建立されていないため，菊楓蒔絵扉はいったん三本木の北政所の屋敷におかれていたと考えられる。北政所は，すでに慶長３年に，京都寺町通に，生母朝日局のために康徳寺を建立して，その菩提を弔っている。その北政所が，三本木で秀吉の菩提を弔っていたことは，十分想像できる。証明は不可能だが，その時点で制作された秀吉の厨子が現北政所厨子ではないだろうか。

やがて，北政所は，慶長８年に後陽成天皇から「高台院」の号を賜り，慶長10年９月に，徳川家康から高台寺に百石の寺領を安堵されている。この時点で，高台寺がはじめて歴史上に登場する。ただし，このときにはまだ，現高台寺の土地には，やはり北政所が建立した康徳寺があったことが『慶長日件録』により確認できる。家康の助力により高台寺が落慶したのは慶長11年で，このときに伏見城から化粧御殿と前庭を移転したことが記録に残っている。北政所は，譲り受けていた秀吉遺愛の材である菊楓蒔絵扉を用いて，現在の秀吉厨子を高台寺に作り，その際に菊楓蒔絵の裏面に厨子扉にふさわしい構図としてあらたに薄蒔絵をほどこし扉表とし，同時にいったん秀吉を祀っていた厨子をみずからの厨子として霊屋に並置したと考えたい。

以上のように，伏見城における菊楓蒔絵，三本木における松竹蒔絵，高台寺における薄蒔絵，という三段階の成立過程を考えることによって，統一性のない霊屋の扉の蒔絵のあり方を理解することができると考える。伏見城から高台寺への10年の幅というのは，様式が変化するための幅としてはたしかに短いかもしれない。しかし，今回問題にしたのは，裏面の菊楓蒔絵から表面の薄蒔絵という様式の変化ではなく，様式の相違であった。

そして，このように考えた場合，「高台寺蒔絵」という概念についても高台寺霊屋の厨子にほどこされた蒔絵と共通の意匠を示す蒔絵の総称という表現をより厳密に考えてゆく必要が生じる。換言すれば，高台寺の厨子の蒔絵の様式を一元的に捉えることに無理があるという認識から，「高台寺蒔絵」研究は再出発するべきだと考える。霊屋の蒔絵の様式の幅を念頭においてはじめて，「高台寺蒔絵」といわれる調度品類の多様性を的確に把握することができるようになると考える。